

「外国ルーツの子ども」という経験が進路選択に与える影響

—中国にルーツをもつ大学生の語りから—

高橋 朋子（近畿大学）

要旨

本論は、中国にルーツをもつ大学生の語りを通して、「外国ルーツの子ども」としての経験が進路選択に与える影響を検討している。中国ルーツの大学生 4 名と大学院生 1 名へのインタビューをもとに、簡易 TEM 図を用いて彼らの人生の視覚化を試み、それぞれの地点での選択を「後押ししたもの」と「阻害したもの」に分けて考察を行った。その結果、教育達成に至るまでには様々な要因が存在し、学齢期に阻害したと思われた要因も、後に後押し要因となった可能性があることがわかった。また、本研究では教育達成を「大学進学」と定義したが、「人生の成功＝大学進学」とは限らず、多様な生き方が認められるべきであるという点も議論している。

【キーワード】 外国ルーツの子ども，教育達成，進路選択，TEM， 母語

Keywords: Children with foreign backgrounds, Educational achievement, Career path selection, TEM, Mother language

1 はじめに

1990 年以降、「外国にルーツをもつ子ども」と呼ばれる児童生徒（以下、外国ルーツの子ども）が日本の学校に現れ始めた。移民の定住化，長期滞在化（永吉 2020）に伴い，その数は一層増加している。令和 6 年の文科省の調査（2024）によると，日本語指導を必要とする児童生徒は約 58,307 人であり，この 10 年間で約 1.8 倍増となっている。また，日本語能力に問題がなく，この数に含まれていない子どもたちも多数いるため，実際の移民二世代の数は

さらに多いと推測される。来日後、言語や文化の壁など多くの困難を抱え、苦勞して日本社会に適應しようとした一世の両親をもつ二世代はどのように教育達成をしてきたのだろうか。

2021 年、中国にルーツをもつ大学生と出会った。彼によると、中国人集住地域に住んでおり、同学年に中国ルーツの子どもが 10 名以上いたが、大学に進学したのは彼一人だという。友人の多くは中学卒業後、就職したり、高校に進学したりしたが中退している。同じ学校で教育を受け、同じ中国人集住地域に居住していた彼らの進路選択はなぜ、異なったのだろうか。進路を分けた要因は何なのだろうか。

本稿の目的は、移民二世代の教育達成に影響を与えたものは何かを探ることである。それを明らかにすることで、外国ルーツの子どもたちの教育達成に必要な支援のありかたに貢献できると考える。なお、本稿では教育達成を「大学に進学する」と定義したが、その是非についても議論したい。

2 移民二世代の教育達成に関する先行研究

アメリカ移民二世代における適應の分岐に関する理論に Segmented Assimilation Theory（分節的同化理論）（Portes & Rumbaut 2001）がある。二世代の教育達成を規定する要因として、親の人的資本、家族構造、編入様式（受入国における政府の方針、移民集団に対する偏見の有無やその程度、同胞コミュニティの規模や構造）があげられている。この理論は移民二世代の教育達成を広く階層論的な視点から見るという分析枠組みの妥当性自体は概ね肯定されている（是川 2018）。

一方、是川（2018）は、国勢調査のデータを用いて母親の国籍別に見た子どもの高校進学率を分析した。その結果、親世代の階層的地位と子どもの高校在学との結びつきは相対的に弱く、分節的同化理論は日本には妥当しない可能性が高いと指摘した。また、額賀（2021）は、ホスト国である日本と出身国の文化の獲得度や帰属感的程度から、二世代のアイデンティティを 4 つに類型化した。「エスニックアイデンティティの複数性が教育達成の分岐につなが

る」とし、この中で学業や地位達成において優れた結果を出すのが「ハイブリッド志向型」であった。しかし、アイデンティティは可変的なものであることに加え、教育達成は長期間にわたる学齢期の結果であることを考えると、アイデンティティのみで検討することには限界があるといえるだろう。

つまり、理論や類型化には限界があり、社会構造と結びつかない要因を探るには、教育達成のプロセスをミクロレベルで検証する必要があるのである。

3 データ収集と協力者

そこで、本論では移民二世代の教育達成について、半構造化インタビューを実施し、小・中学校および高校時代から大学生活を振り返り、どのようにして進路を選択してきたかを語ってもらうことにした。

調査協力者は5名、いずれも中国人の親をもつ二世代の大学生または大学院生である。調査期間は、2021年3月から2022年2月である。A, B, Cは対面で、D, EはZoomにて実施した。一人につき約2時間程度、日本語でインタビューを行い、承諾を得て録音し、文字化したあと消去した。事実確認やさらなる質問は、メールで行った。

表1：調査協力者の概要

名前	年齢	性別	学歴	家族構成	両親の学歴	中国語能力	大学の専攻	現在の職業
A	20代	女性	大学生	両親、弟	父母高卒	日常会話	英語	英語教員
B	20代	女性	大学生	両親、弟	父母高卒	日常会話	中国語	会社員
C	20代	男性	大学生	両親、弟	父母高卒	日常会話	中国語	会社員
D	20代	男性	大学生	両親、兄	父母高卒	単語レベル	英語	会社員
E	20代	男性	大学院生	両親、姉	父母高卒	日常会話よりやや劣る	地学	大学院生

4 TEM 図

TEM（サトウ 2009）は Trajectory Equifinality Model（複線経路・等至性モデル）と呼ばれるもので、個々人がそれぞれ多様な経路を辿っていたとしても

等しく到達するポイント（等至点）があり，そこに至るまでの人間の思考や行動，態度，感情の時間的な変化とその多様なプロセスを捉えることを目的としたモデルである。多様な二世代の生き方を一般化せず，一人ひとりの経験とミクロレベルで向き合うこと，彼らの生活に起こったできごとがどのような意味を持っていたのかを探るために，最適な方法であると考え。インタビューデータをもとに，彼らの人生を TEM 図に描いた。本来 TEM 図は，多くの用語を使用し，かなり複雑で込み入った線を記述する必要があるが，本稿では人生の選択に影響を与えた要因を明らかにするため，特に選択を「後押ししたもの」「阻害したもの」の2点を焦点化して図示することとした。以下，5名の簡易 TEM 図¹を示す。詳細な TEM 図については高橋（2021）を参照されたい。

5 TEM 図で描く協力者の人生

順に TEM 図を見ていく。図の真ん中にある上から下への矢印は，不可逆的時間を表す。最下部は教育達成つまりこの図のゴールを示している。図の左側には選択を後押ししたもの，右側には選択を阻害したものを示している。吹き出しはインタビューで語られた調査者の気持ちであり，人のアイコンで示された発言は，他者からのものである。A は 9 才で来日，B-E は日本生まれである。年齢は調査当時のものである。

では，A について見てみよう。A は，9 才で来日後，日本語のできない親の代わりに弟の世話や仕事の通訳を経験している。そのことで友人と遊ぶ時間も少なく，また経済的な理由により，塾へ行ったり部活動に参加したりすることもできなかったという。弟は，A の助言で大きな困難を抱えることなく，高校大学進学を果たす。その経験が大学での留学生サポートや高校の英語教師となって外国ルーツの子どもを支援するという夢につながり，外国籍教員として採用されている。しかし，通訳や翻訳作業を通して「先生の中国語は幼稚だ」と保護者に言われたことがきっかけとなり，台湾への語学留学を決意した。自分の武器である中国語に磨きをかけたいと話している。

図 1：協力者 A の TEM 図

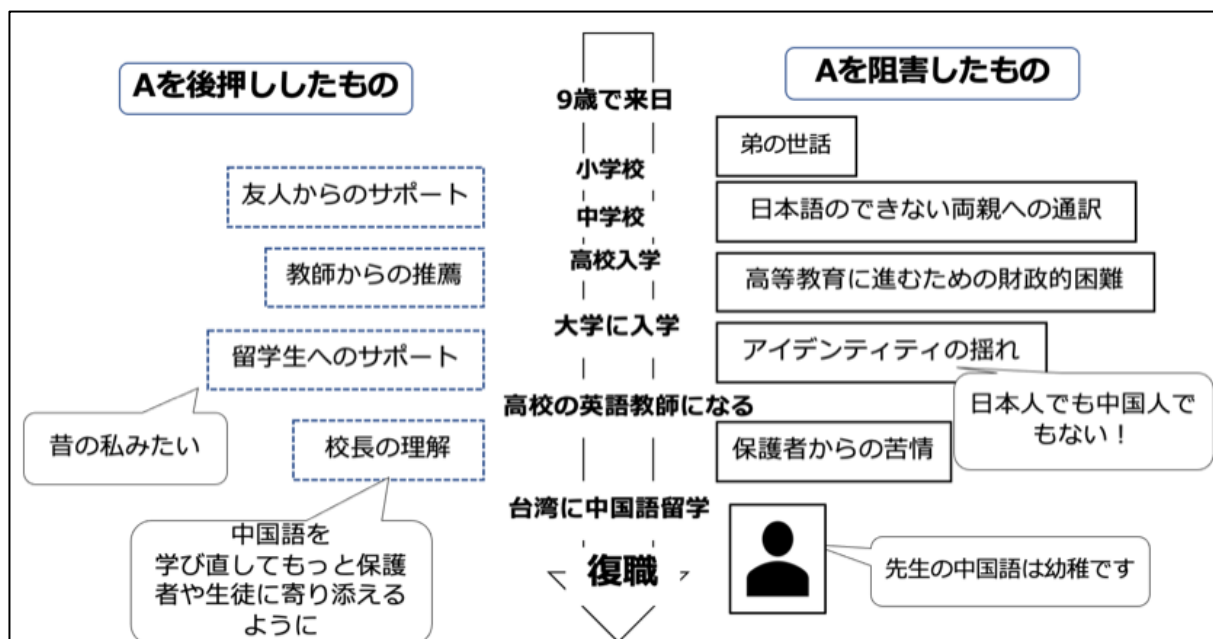


図 2：協力者 B の TEM 図

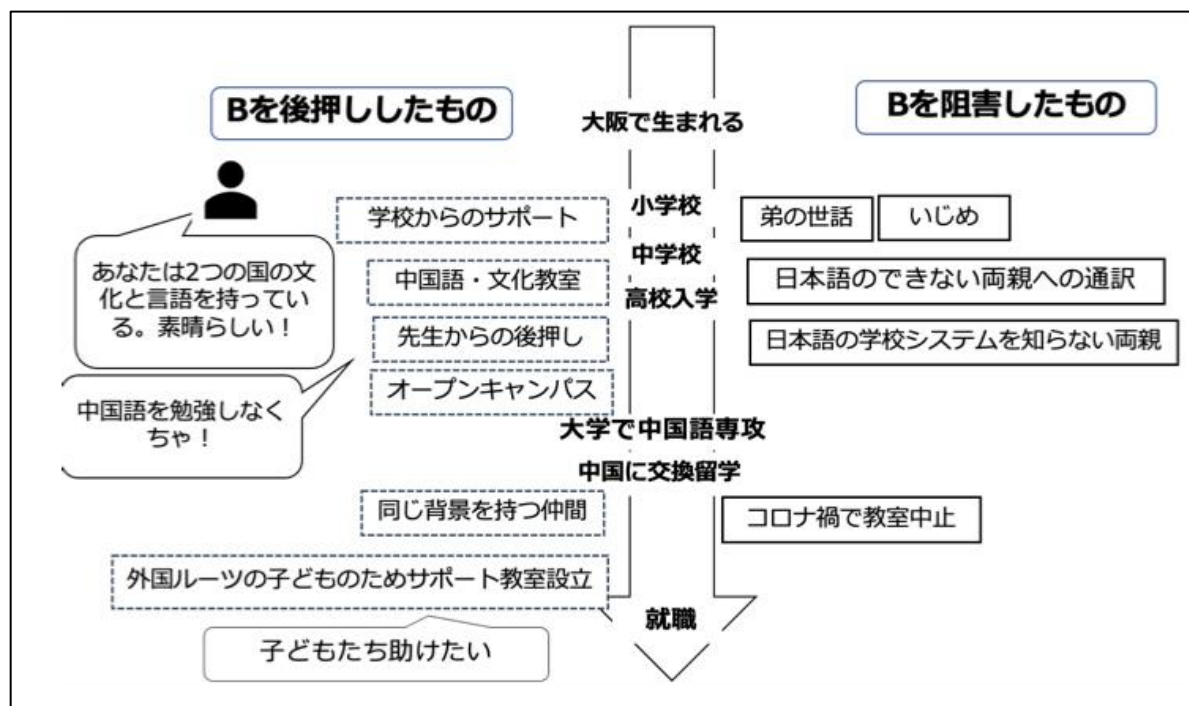
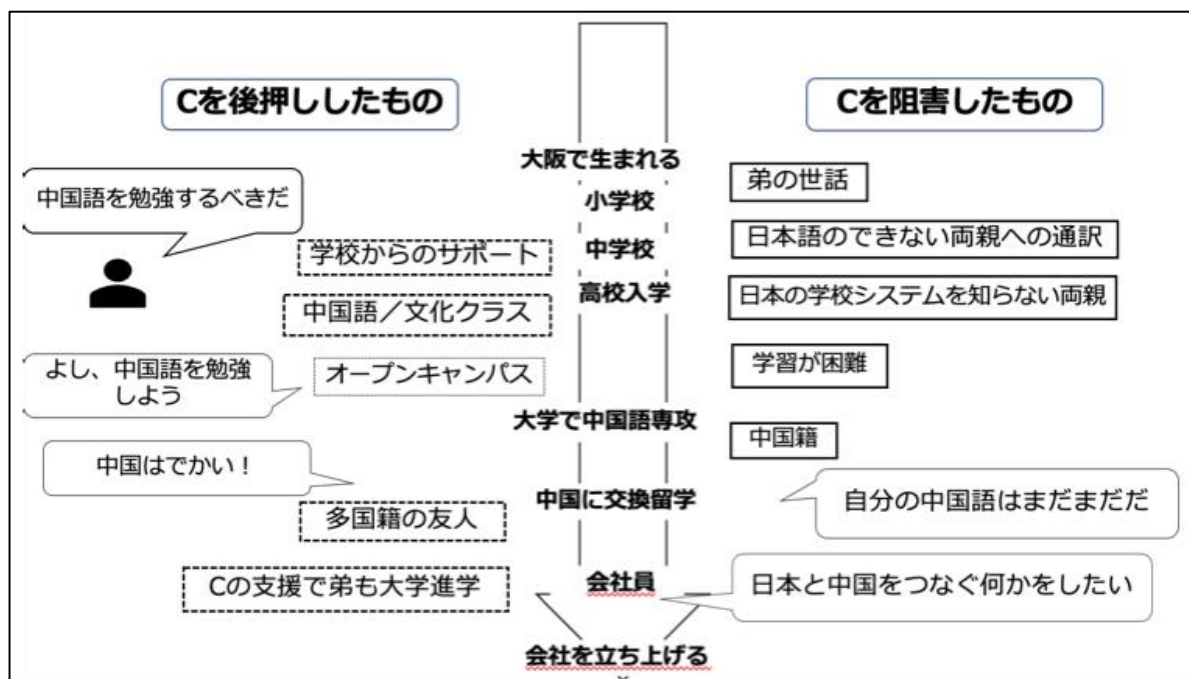


図 2 は B である。B も A のように幼少の頃から、弟の世話や日本語のできない両親の通訳を経験している。しかし、中国人児童が数多く在籍していた学校に通ったことで、中国語の母語教育を受ける機会に恵まれた。「2つの文化を持った素晴らしい子どもたち」と言われたことを今でも忘れないと

いい、中国語が話せる自分が誇らしく、語学を利用して仕事をしようと考えたと話していた。大学のオープンキャンパスに参加した際、中国語専攻があることを知り進学を決める。進学後は、中国に留学し、自分の武器は中国語であることに気づく。小さな頃に弟を世話した経験から外国の子どもたちをサポートするため支援教室を立ち上げる。

図3：協力者CのTEM図

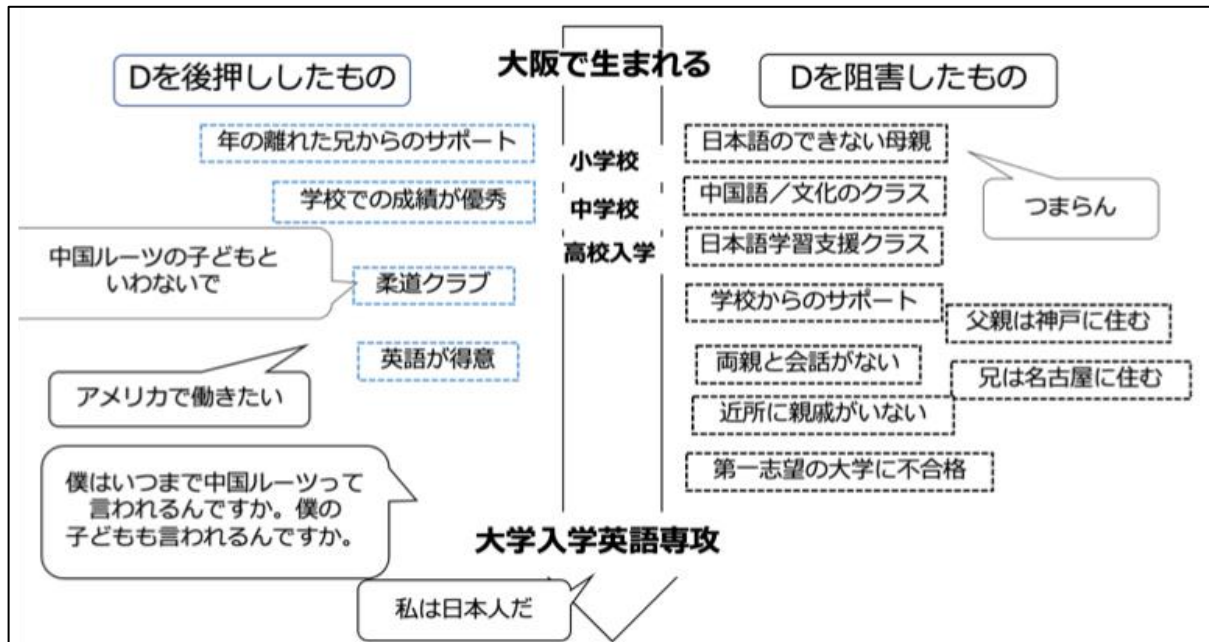


Cも、A、Bと同じように小学校時代より弟の世話をし、両親の通訳をしている。「父親の仕事の面接とあって、もう何言われてるかあんまりわからへんかって、つらかった。そのおかげで早くから社会を見たと思う」と述べている。日本の教育制度を知らない両親からの学習支援はなく、「民族学級の先生がどこまでも追いかけてくれて」面倒を見てくれたことが、高校入学や大学進学につながったという。「夏休みの宿題がオープンキャンパスに行くことだったんですよ。そこで先輩にあって話聞いて『俺もやろう』って思いましたよ。あれなかったら今頃なにやってるか・・・」と語っている。

Dは、年の離れた兄がいて、小さな頃から面倒を見てもらっている。日本語のできない母親の通訳は兄がしていた。英語が好きでアメリカ留学を計画している。今回のインタビューの最初に「俺って中国ルーツってやつですか。中国語もできひんし、行ったこともないのに。俺の子どもも言われるん

ですか。」と聞いてきた。

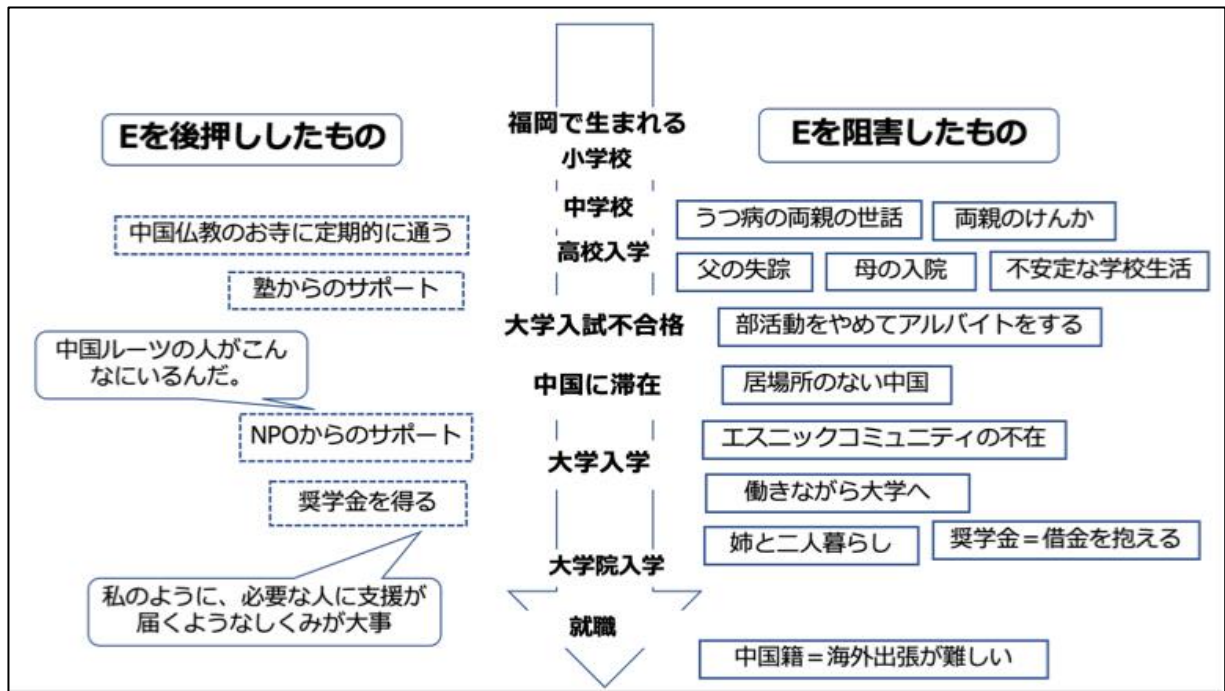
図 4 : 協力者 D の TEM 図



彼は中国ルーツとまなざされることを拒否しているようだった。なお彼は小学校時代に母語、母文化教室に参加しており、そのルーツは学校で「誇るべきもの」として認められていた。にもかかわらず、この母語教室が苦痛だったと振り返り、彼は今でも中国語が話せない。「小学校で中国語を学ぶ機会があつてよかった」という考え方は、研究者の一方的な思い込みに過ぎないのである。

最後に E の TEM 図である。E は幼少期に家族関係が不安定で非常に辛い日々を送っている。両親の通訳や兄弟の世話どころか、明日食べるものにも困って親戚を回ったりアルバイトをしたり中国へ送られたりと頻繁な移動を経験している。中国人散在地域に住んでいたため、一人の中国人に会ったこともなく、コミュニティからの支援もほぼゼロであった。そのため、彼の学校生活は何度か中断している。大学入学時に外国ルーツの子どもたちを支援する NPO と出会い、「やっとお金の心配をせずに暮らせる」と安堵したと話していた。彼は、「ぼくのように情報にたどり着けない子どもはいっぱいいると思う。彼らと情報をつなぐ仕組みが必要だ」と何度も語っていた。

図 5：協力者 E の TEM 図



6 考察

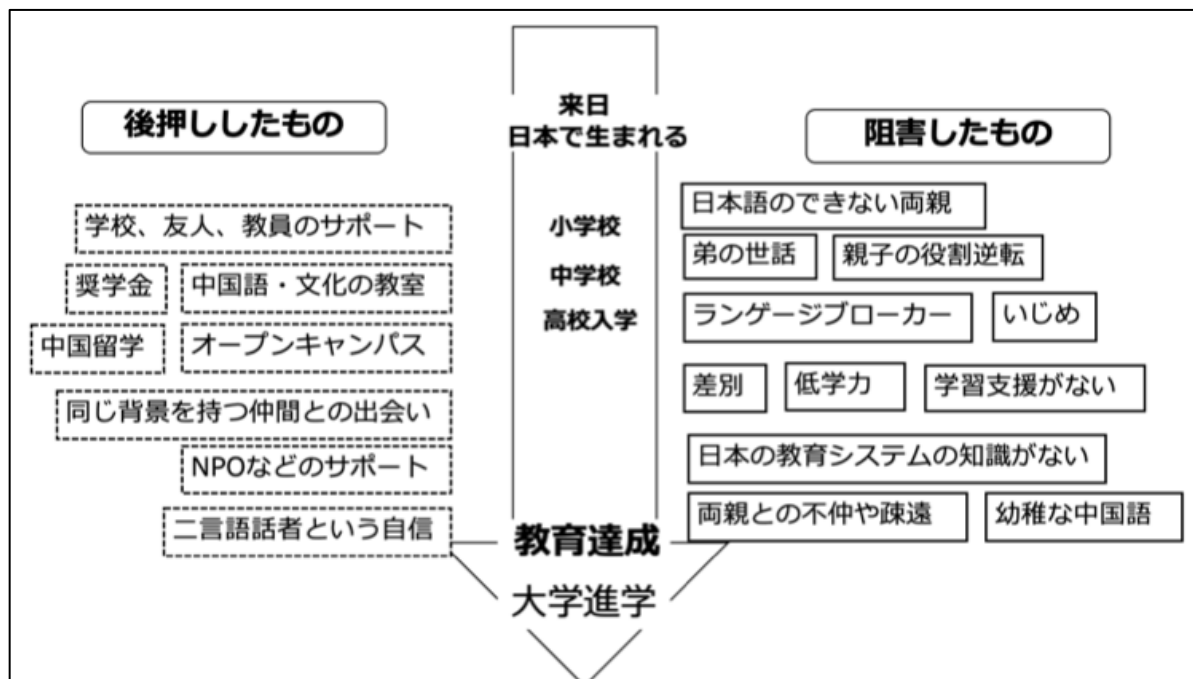
では、協力者 A-E の TEM 図を 1 つにまとめた図 6 をヒントに、彼らの進路決定に影響を与えた要因を検討したい。図から、「教育達成＝大学進学」までの経路において、多くの人々やできごとが彼らの決定や行動を後押しし、一方で多くの障壁がその人生を阻害していたことがわかる。

6.1 人生を後押ししたもの

協力者を後押ししたものとして、学校関係者や塾の教員からのサポート、日本語支援や母語教室、情報の提供などがある。特に小学校での学習支援の手厚さに感謝しているものが多い。小学校時代に「2つの国を生きる素晴らしい子ども」と言われたことが彼らの自尊心を育み、アカデミックアイデンティティにつながった。地域の教室に参加したことで、奨学金の情報を得たものもいた。移民に対する公的な支援政策が皆無であり、地域によって子どもたちへの学習支援に温度差がある日本において、身近な人からの働きかけやエンパワー、そして情報は強固な力となりうる。Lee & Zhou (2015) は、第一世代の資源の不足を十分に補い、第二世代の成功に欠かせないとされているが、日本においてはその役割を学校、塾、教師、NPO などが担っていることが明

らかになった。

図 6：協力者 A-E の TEM 図をまとめたもの



6.2 人生を阻害したもの

一方、阻害したものも数多くある。ここでは「ランゲージブローカー」（言語ができない両親の通訳をすること）と「ヤングケアラー」（仕事が忙しい両親に代わって弟妹の世話をすること）を取り上げたい。長子である A, B, C の3名は幼少期に「ヤングケアラー」と同時に「ランゲージブローカー」を経験している。学校での懇談会から親のアルバイトの面接，不動産の賃貸契約など，およそ小学生では認識が追いつかない内容の通訳をつとめた彼らにとって，精神的なストレスは図りしれず，親子の立場逆転を引き起こす危険性もあるだろう。

Zhou (1998) は，コミュニティには儒教精神や孝順（親孝行）が内在化しており，現地化した子どもたちであっても親や家族のためにその役割を担うことを厭わない状況を報告している。本調査の協力者も，「いやだと思ったことはない」「親ができないなら，自分がするしかなかった」と答えている。

さて，ここで留意したいのは，「阻害したもの」は非難されるべきだけのものではない，ということである。特にランゲージブローカーに関しては，欧米でも“I helped my mom”（Wu and Kim 2009）と母親を助けることに喜びを見

出す子どもやその経験を将来のキャリアにつなげた学生の事例（Guan & Shen 2015）もある。A, B, C の 3 名は、これらの経験が、後に「人を助ける」「中国語を使って仕事をする」「留学する」といった経路を歩くのに「後押し」する要因となっている。D, E のように年上の兄姉がいたものは、兄姉がヤングケアラーかつランゲージブローカーであり、自分をサポートしてくれたのである。そこに進路選択の分岐要因の 1 つの可能性があると推察できる。

後押しした要因と阻害した要因は必ずしも対立するものではなく、関連し合って彼らの進路選択に影響を与えている。しかし、進路選択の結果がよければよいという話ではない。やはりヤングケアラーは深刻な問題であり、ランゲージブローカーの精神的言語的ストレスは子どもの能力を超えている。ただ、本調査の協力者はこのような経験をただネガティブなものとして受動的に役割を受け入れたのではなく、自らの力でバイリンガル能力の保持や伸長につなげ、それを活かしてキャリアを切り開く力に転換したと言えよう。

これらの問題は個人的なものではなく、社会的構造の中に埋め込まれている。解決するには、親世代が言語を学ぶ場や、ワーキングバランスを考えた働き方など、社会が移民家庭を支えるしくみが求められる。

7 おわりに

本稿では、中国ルーツをもつ移民二世代の若者の進路選択に影響を与えた要因について TEM 図を見ながら、検討をした。後押ししたもの、阻害したものが多様にあったが、必ずしも阻害したものが悪にとどまらず、後にそれをきっかけとして人生が変容していく状況も確認した。重要なのは、彼らに関わる周りのものが、できるだけ多くの「後押し」をしながら、「阻害」要因も「後押し」に変わることがあることを認識し、サポートが必要なときに支援ができる準備をしていくことであろう。求められる後押しには、日本語支援や教科学習支援、母語や母文化の教育、アイデンティティを認める仲間づくり、高等教育への水路づくり、情報提供などがあり、日本においては親の資源やエスニックコミュニティを超える力を持っていると考えられる。

さて、最後に2点考えたい。1点目は「教育達成」とはなにかである。本稿では、「教育達成」として大学進学を果たしたものに調査を行った。しかし、果たして「教育達成＝大学進学＝成功」なのであろうか。近年の日本社会においては多様な生き方が認められている。にもかかわらず、外国ルーツの子どもの人生を考える際に、大学進学を成功した進路選択のように捉えがちではないだろうか。

2点目はアイデンティティである。移民二世代は、ハイブリッドなアイデンティティ、つまり日本にも中国にも帰属感を持つことが求められがちだ。しかし、2つの国にルーツをもつからといってその両方のアイデンティティを持つことが当然であるというのは我々の勝手な思い込みだろう。本論の協力者の中にも中国ルーツであることを否定し、日本人として生きていきたいと考える学生がいた。彼は、英語を専攻し、アメリカに留学し、会社員として生きている。これも1つの教育達成の形である。

本調査の協力者を見る限り、彼らが移民二世代のすべてを表していると言い難い。彼らは多様で、決して一枚岩ではないからだ。どのような進路選択をしようとも、温かくまなざすことのできる社会をつくっていくことが求められている。

<注>

1. TEMには多くの用語が使用される。ここでは、等至点を「ゴール」、社会的ガイドを「後押ししたもの」、社会的方向づけを「阻害したもの」と言い換えて使用している。

<引用文献>

是川タ（2018）「移民二世代の教育達成に見る階層的地位の世代間移動—高校在学率に注目した分析—」『人口学研究』 54, pp.19-42.

サトウタツヤ（2009）『TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研

究をめざして』誠信書房.

高橋朋子 (2009) 『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー』生活書院.

高橋朋子 (2021) 「移民第二世代の進路選択に影響を与える要因—母語教育を受けた中国ルーツの子どもの事例—」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』12(1), pp.1-21.

永吉希久子 (2020) 『移民と日本社会 データで読み解く自体と将来像』中公新書.

額賀美沙子 (2021) 『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』pp.43-68, 明石書店.

文部科学省 (2024) 「外国人児童生徒等教育の現状と課題」

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/r05/pdf/9406330105.pdf (2024 年 9 月 20 日) .

Guan, S. & Shen, J. (2015). Language brokering and parental praise and criticism among young adults from immigrant families. *Journal of Child and Family Studies*, 24, 1334-1342.

Portes, A. & Rumbaut, R. G. (2001). *Legacies*. University of California Press.

Lee, J. & Zhou, M. (2015). *The Asian American Achievement Paradox*. Russell Sage Foundation.

Wu, N., & Kim, S. Y. (2009). Chinese American adolescents' perceptions of the language brokering experience as a sense of burden and a sense of efficacy. *Journal of Youth and Adolescence*, 38, 703-718.

Zhou, M. (1998). Parachute Kids in Southern California: The Educational Experience of Chinese Children in Transnational Families, *Educational Policy*, 12 (6), 682-704.